

聖書：創世記2：1～3

説教題：この日を聖なるものと

日時：2019年7月14日（夕拝）

創世記1章では天地創造の第1日から第6日の神のみわざが記されました。今日見る2章1～3節には第7日のことが記されています。この日に神がされたことは何でしょうか。2節に「なさっていたすべてのわざをやめられた」とあります。この「やめられた」ということにはどんな意味があるのでしょうか。私たちが何かをやめる時、そこには色々な理由があると思います。疲れてやめてしまうとか、途中で考えや計画が変わってやめてしまうとか、……。しかしここはそういうことではありません。神がこの日にやめられたのは、1節にありますように、天と地とその万象が完成したからでした。天地創造のみわざが、目標に到達し、そこに何も付け加える必要がない素晴らしい状態に達したからでした。

私たちは1章で、神が一つ一つのものを造られた後、それを見て「良しとされた」という言葉を見て来ました。そして1章31節には「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」という言葉がありました。この6日間の創造のわざを経て、第7日にはそれに付け加えるべきことは何もなかったのです。2節にある通り、「なさっていたわざは完成」したのです。そこで神はなさっていたわざをやめられた。そう考える時、ここには神のどんなに大きな満足と喜びとがあったことでしょうか。

私たちは今でもこの世界や宇宙を眺めて素晴らしいと感じることはあります。また被造物の冠である人間を見て、その卓越さ、美しさ、素晴らしさに感動することもあります。しかし1章31節の、神の目から見ても「非常に良い」と言われる状態を思うなら、現在はそこから遠く隔たっていることを思わざるを得ません。それはこのあと3章で見る通り、人間が罪を犯したからです。しかしその前の時点では、神が天地創造された直後においては、輝いていないものは一つもこの世にありませんでした。天地に置かれている作品すべては、その作者なる神の光を放っていました。特に神のかたちとして造られた人間はそうでした。そこにある世界は見事に調和し、何一つ物足りないものはありませんでした。そこで神は第7日に創造のわざをやめられたのです。

ではこの第7日に神は何をされるのでしょうか。ヨハネの福音書5章17節：「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」 このイエス様の言葉によると、父なる神は一日たりとも働いていない日はないということになります。とすると今日の箇所とどう整合するでしょう。今日の御言葉を良く見てみると、神はこの日に何の働きもしなかったとまでは言われていません。2節に「なさっていたすべてのわざをやめられた」とあります。やめられたと言われているのは、それまでなさっていたわざについてです。つまり神は創造のわざはやめられたけれども、そうでないわざは行っているということになります。それは何でしょうか。それは一言で言えば、造ったこの世界を支え、保ち、導く働きです。私たちはともすると、神は最初の6日間で世界のすべてを造り、あとは自然法則などに任せてご自身は暇にしている、あるいはあまり深くは関わっておられないかのように考えがちかもしれません。しかし聖書によればそうでありません。詩篇121篇4節：「見よ、イスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。」 詩篇104篇29節：「あなたが御顔を隠されると彼らはおじろい、彼らの息を取り去られると彼らは息絶えて自分のちりに帰ります。」 神が続けて支える働きをしてくださらないければ、この世界は一瞬にして解体し、無に帰すのです。

3節に、この第7日にしたこととして「神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。」とあります。「祝福する」という言葉は1章22節と28節に出て来ました。そこでは生き物を祝福したこと、また人間を祝福したことが記されていました。しかしここでは第7日という「日」を祝福したとあります。これはどのように考えたら良いでしょうか。それはこういうことでしょう。神はこれまでもご自身が創造したものを祝福して来られましたが、その祝福に加えてこの第7日を特別な祝福の日としたということです。創造のみわざが行われた日々にも祝福はあったけれども、ある「日」を祝福したと言われているのはここが初めてです。つまりこの日こそ「祝福の日」と呼ばれるべき日である。ですから創造の六日目、人間が造られた日がクライマックスではありません。確かにそれまでの中でも6日目がクライマックスではありますが、この第7日こそ神が祝福の日とされたクライマックスの日です。

この日を「聖なるものとされた」という言葉も同じことを示しています。聖書における「聖とする」という言葉の基本的意味は、神に向かって取り分けるとか、区別するとか、聖別するということです。つまりこの日は先の6日間と区別されました。神へと取り分けられ、神にささげられる日とされたのです。

さて神がこのように第7日を聖なるものとされたことは、私たちにとってどんな意味を持つでしょうか。この箇所と切り離して考えることができないのは、十戒の第4番目の戒め、安息日の戒めでしょう。出エジプト記20章8～11節：「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。それは主が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。」ここに安息日の戒めは天地創造における神のパターンにならうものであることが示されています。ここから推測されることは、「6日間働いて7日目は休む」というあり方は、十戒が与えられたモーセの時代になってから始まったものではなく、天地創造の直後から人間の歩みを規定する原理となっていたのであろうということです。なぜ人間はこのように天地創造の神のあり方をまねるべきなのでしょう。これと関係が深いのは創世記1章26～27節で、人間は神のかたちとして造られたと言われていたことです。人間は神に似る者として、神を鏡で映し出すような存在として造られました。人間を見れば神がどのようなお方が分かって来る。そのような特別な存在として造られました。その人間は、その存在においてばかりでなく、具体的な生活の仕方においても神にならうのです。神が6日間働いて7日目にそれをやめたように、人間も6日間働いて、7日目にその働きをやめる。主がこの第7日を取り分け、聖なる日としておられるように、私たちもこの日をそうする。神がこの日にそれまでの手のわざをやめて、造られたものに向かって祝福を注いでくださるように、私たちもそれまでの手のわざを休めて、この日は専ら神に心を向け、神との交わりを通して、いのちと喜びを豊かに満たして頂く。このようにその生活パターンにおいても神にならうことによって、私たちはいよいよ神を映し出し、神のかたちを発展させていくようにと召されているのです。

具体的にこの日、私たちはどう生活すれば良いのでしょうか。この点で私たち日本長老教会の信仰基準であるウェストミンスター信仰基準が大いに助けになります。ウェストミンスター信仰告白第21章8項：「それで、この安息日は、人々が自分の心を正当に準備し、その日常の用務をあらかじめ整理したのち、この世の職業や娯楽についての自分の働き・言葉・思いから離れて、まる一日きよい休息を守るのみでなく、神礼拝の公的私的営みと、やむをえない義務と慈善の義務とに、全時間従事するとき、主に對し

できよく守られる。」　ここから 3 つのことを確認することができます。一つ目は、この安息日は基本的に丸一日を神礼拝のためにささげるべきであるということです。先ほどから見て来ましたように、この日は他の 6 日間とは区別されるべき日です。この日全体がそうです。礼拝する時の 1 時間程度ではありません。この日一日を他の 6 日間から切り離して、神を礼拝し、神と交わり、神によって十分に休みをいただくように、そうして心も体をリフレッシュして新しいのちを満たしていただくように、努めるべきであるということです。

2 つ目は、そこには例外があるということです。信仰告白の言葉によれば、それは「やむを得ない義務」と「慈善の義務」です。「慈善の義務」についてはすぐ納得できると思います。困っている人、助けを必要としている人たちがそばにいるのに、それを無視して、私は神を礼拝するというのが正しい在り方ではありません。その人たちのためにあわれみの手を伸ばし、仕える働きをすることは主のみこころに一致することです。問題になるのは「やむを得ない義務」の方でしょう。何をもってやむを得ないと判断するのか。具体的に考える時、そこには色々な意見の相違が出て来るに違いありません。ここでその詳細を論じることはできません。しかし私たちはこれを安易に考えないようにしなくてはならないと思います。「これはやむを得ない」「これもまたやむを得ない」と言っていたら、すべてがなし崩しになります。そうならないために問われるべきことは、信仰告白の言葉も述べているように、この安息日を守るための精一杯の準備と努力を怠らなかつたかということです。ですからこの安息日の問題は他の 6 日間をどのように過ごすかという問題とも関わって来ます。この日は朝起きた時から夜寝るまで神礼拝に心と体をささげられるように、他の日にできることは他の日に行い、あらゆる妨げを取り除いておくという取り組みが肝要です。

そして三つ目は、安息日の原理は私たちの口から出す言葉や、その心に思うことといった内面の問題にまで関わるということです。単に外側の体が働いていなければ良いのではないのです。他の日なら私たちの心を占めても良いこの世の仕事や趣味のことであっても、この日はそれらに心が奪われないようにする。聖日にふさわしい思いをもって一日を過ごすようにする。こう聞くとある人たちはこの日を窮屈な日のように思うでしょうか。しかしこれは私たちの心がどこにあるか、何を一番愛しているかに関わって来る問題でしょう。もし私たちが神を愛するより、この世の生活やこの世の楽しみに心が向いているなら、安息日をこのように過ごすことは重荷となって来ると思います。しか

し神を愛し、神との関係を第一に考える心が上に来ているなら、そうではありません。確かに理想通りにはなかなか行かないと思います。ましてや心の内面にまで関わることを覚えるならそうです。しかし様々なこの世の心遣いや、他の6日間になすべきことが心に上って来ても、それらの問題を神に委ねて、まずはこの日は神へと取り分けて過ごす。神に信頼して、この日は神を礼拝し、神との交わりから十分な力と恵みとを受けることができるよう過ごす。そこに他の6日間も上からの力によって過ごし、神に導いていただくための秘訣があるのではないのでしょうか。

神はこの世界と私たちを造って終わりとせず、この第7日を祝福の日、聖なる日としてくださいました。この神の御心を感謝して、私たちも神のかたちに造られたものとして、神にならってこの日を取り分け、神に向かい、神との豊かな交わりの祝福に生きる者とされたいと思います。そしてこの安息日はやがての究極の安息、天国を待ち望むものでもあります。私たちは週ごとにこの安息日を神の御心に沿って過ごすことを通して来たるべき真の安息を先取りし、その前味を味わいつつ、最後の祝福に向かう歩みを励まされ、力づけられて行きたいと思います。